

1-3 連携の大切さ

通級による指導を進めるに当たっては、在籍校や通常の学級担任、保護者、関係機関との連携が欠かせません。

特別支援教育コーディネーターとの連携

校内における教育支援体制の状況把握に努めましょう。共に通常の学級担任をサポートする立場にあるので、常に気軽に相談し、協力し合う関係を作っておくことが大切です。その際、学校内の支援等を効果的に行うため、特別支援教育コーディネーターとの役割分担を明確にします。

また、他校通級や巡回指導において、他校の児童生徒を指導している場合は、その学校の特別支援教育コーディネーターとの連携を図ったり校内委員会に協力したりすることも望まれます。

コラム⑨ 《特別支援教育コーディネーターとの連携》

校内の特別支援教育の要は、校長が指名する特別支援教育コーディネーターであり、通級担当教員にとっては連携のキーパーソンでもあります。特別支援教育コーディネーターとの会話には、指導や支援に係わる重要な情報が含まれています。特別支援教育コーディネーターとの連携なくしては、通級担当教員は全くの無力であり、何をやっても独り相撲です。連携はフォーマルな場だけでなく、インフォーマルの場でも大切です。職員室の席を隣にしてもらい、職員室から教室に行くときに話しながら一緒に行くなど、積極的に雑談をする機会を作っていきましょう。素晴らしいひらめきは、雑談の中から生まれるものです。

特別支援教育
コーディネーター



嫌なことがあると、飛び出したり隠れたりする子どもがいるので、1年生の担任が困っています。ケース会議で支援について助言をください。

通級担当教員



分かりました。ケース会議の前に、1年生の様子を見に行きます。



特別支援教育
コーディネーター



校内委員会で、通級による指導が必要ではないかという支援の方向性が出ています。保護者も望んでおられます。

通級担当教員



対象となる子どもやその保護者、担任の先生と懇談をもちましょう。教育相談の日程調整をしてください。

コラム⑩ 《通級とは・・・》

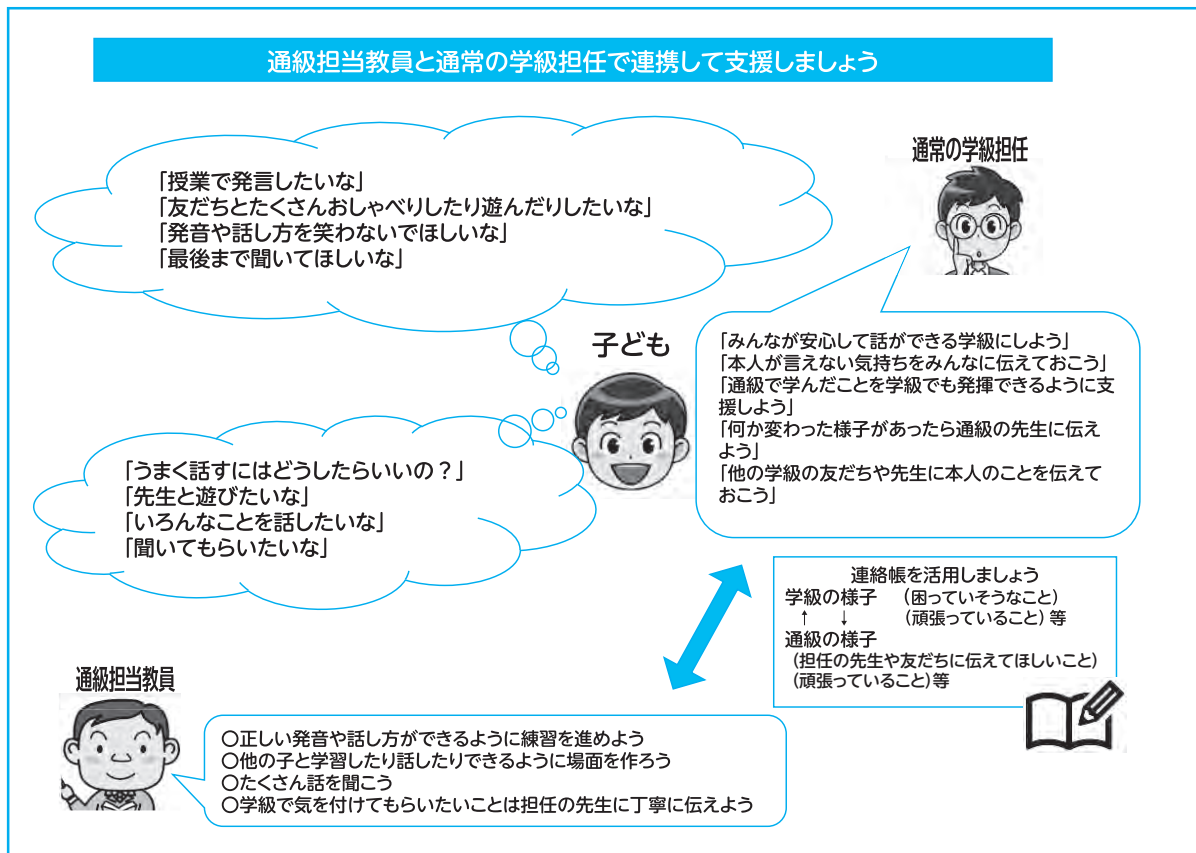
通級は、指導・支援を行う教室としてだけでなく、心の安定を図る居場所としての役割も大切です。「通級のおかげで、楽しい思い出がたくさんできて、今までの苦しみが全て消えてなくなった」と言う子どももいます。また、「僕と同じように困っている子を助けてあげて欲しい」と、友だちを連れて来ることもありました。こうして支援の輪が広がり、どの子どもにとっても身近に感じられる教室になればと思っています。



通常の学級担任との連携

通級担当教員は通常の学級には教育上特別の支援を必要とする児童生徒等がいることを常に想定し、児童生徒等のつまずきの発見に努めるとともに行動の背景を正しく理解するようにします。

通級担当教員と通常の学級担任の連携においては、定期的な来室面談の他、巡回相談や電話やメール、連絡帳などを活用する方法も考えられます。



コラム⑪ 《学級づくりが要》

通常の学級担任との連携で大切なことは、通級による指導開始が到達点ではなく、「学級担任」としての新たな出発点であるという認識をもってもらえるように学校全体に理解を広げていくことです。通級による指導はあくまで個人、または小集団への介入でしかありません。通級で学んだことを活かせるのは通常の学級です。通級に通う子どもが学びを活かそうとしても、それらを発揮しにくい学級では元も子もありません。子どもが学級への所属感をもち、安心して過ごせる学級づくりが最大の支援です。その支援ができるのは「学級担任」だけです。子どもたちがお互いを理解し合う学級となるように継続的な連携をしていきます。

コラム⑫ 《通常の学級で活かすために》

週1時間や2週間に一度、月に一度などの通級による指導だけで大きな効果を求めるのは難しく、通常の学級担任との連携は不可欠です。通級で指導中の課題や成果をその日のうちに伝え、次回までの間、通級での取組を参考にした指導を通常の学級で継続できるようにしています。また、事前に通常の学級担任から成果や課題について情報を得て、次の通級による指導を効果的に行うための参考にしています。



保護者との連携

面談や連絡帳等で児童生徒の様子を知らせ、協力関係を築いていきます。同時に保護者の支援も大切です。保護者の声にも耳を傾け、助言や支援をしていきます。通級の保護者会やペアレントトレーニングを実施しているところもあります。

コラム⑬ 《保護者の声》

「子どもが学校生活で困っていることに気付きながら、どこに相談すればよいのかが分からず、親として子どもへの接し方にも困っていました。通級による指導を受けるようになり、毎回指導内容を知らせてもらうことで、子どもと目標を共有し、家庭でできることを話し合っています。子どもに分かりやすい提示の仕方や、ちょっとしたアイデアを教えていただくことで親子関係もよくなってきたように感じます。何よりも子ども自身の自尊心が高まり、自分の苦手な事への対処法も分かってきたようで、学級でのトラブルが少なくなったことがうれしいです。」と保護者から懇談で聞かせていただきました。通級担当教員としても保護者の思いに寄り添えることができたと感じました。

保護者



家でもランプなど複数で行うゲームには参加しようとしなかったのが、最近は自分から誘ってくるようになってきたんです。

通級担当教員



それはうれしいことですね。



コラム⑭ 《子どもの思いに寄り添えるように》

読み書きが苦手なディスレクシアの子どもたちは、字を読んだり書いたりすることが全くできないわけではありません。文字が揺れたりぼやけたりすることがあったり、1個1個思い出すのにすごく努力を要するので逐次読みになったり、文節の切り方が分からずに読み方がたどたどしくなったりする場合があります。また、文字を書くときに鏡文字になったりマス目に収めて書いたりすることが難しい場合もあるのです。

周りからは「努力不足、勉強不足」と思われ、読むのが苦手だと「もっと音読の練習をしなさい」、書くのが苦手なら「もっと書いて練習しなさい」と更に努力を求められることもあります。練習しても、努力では追いつかなくて不安に思い、自己肯定感が下がってしまうのです。

子どもが困っていることに早く気付いて、その子どもに合わせた学習を積み上げていくことで達成感を味わわせ、子どもが自信をもち、主体的に学習できるように指導していくことが大切です。

